

## 【特別招待講演1】 第1席

## 「金元鍼灸総説」

中国・上海 李鼎

金元鍼灸（ここでは南宋の鍼灸を含む13世紀～14世紀半ば頃の鍼灸を指す）は、唐宋までの鍼灸を基礎としつつ、新たに鍼法、灸法、選穴法等を大きく発展させた。この時期に形成された鍼灸の諸概念は、その後の中医鍼灸の重要な形成要素となり、また明代鍼灸を基礎として形成された日本近世の鍼灸にも決定的な影響をもたらした。現代の日中鍼灸にとって、『素問』『靈樞』『甲乙経』などの古代鍼灸を第1の源流であるとするならば、金元鍼灸は第2の源流、しかも直接的な源流であるということが出来る。このように金元鍼灸は多くの重要な臨床的価値を含んでいるにもかかわらず、その内容が甚だ複雑多岐にわたっていることもあって、未だ十分に研究が進んでおらず、現時点の評価も定まっていないのが現状である。言うまでもなく、金元鍼灸の持つ意義は、単に13世紀頃の中国の鍼灸事情を歴史的に明らかにするという事にとどまるものではない。むしろ現行鍼灸の諸概念の歴史性を詳細かつ体系的に明らかにしていくことに通ずるものであり、ひいては今後の鍼灸臨床の発展のために重要な意義を持っているのである。したがって隋唐以前の鍼灸の研究と平行して、どうしても金元鍼灸の全体像を研究する必要があると考えるのである。

李鼎先生はこれまで、金元鍼灸について多数の著書、論文を発表されており、私達はこの分野の研究の第一人者であると考えている。特別招待講演1では、以下のようないくつかの論点に基づき、李鼎先生の金元鍼灸総体に対するお考えをおうかがいする予定である。

- 1 金元鍼灸を形成した宋以前の医書・鍼灸書
  - A. 『素問』、史崧本『靈樞』
  - B. 金元医書・鍼灸書中所見の『黄帝鍼経』
  - C. 『難経』とその注解書
  - D. 『甲乙経』及び『銅人腧穴鍼灸図経』『聖濟総録』『資生経』
- 2 金元四大家の鍼灸
- 3 歌賦とその価値
- 4 馬丹陽、竇黙、何若愚、王国瑞などの鍼灸について
  - A. 金元四大家の医説との関係（金元鍼灸の学問的基礎とは何か）
  - B. 子午流注について
  - C. 九鍼について
  - D. 鍼法の手技・手法について
  - E. 鍼灸施術のための脈診法について
  - F. 選穴法について
  - G. 穴の主治證について
  - H. 灸法について（『備急灸法』『癰疽神秘灸経』など）
- 5 杜思敬『濟生拔粹方』所載の鍼灸について
- 6 滑伯仁と『十四経發揮』
- 7 竇黙、何若愚などの鍼灸と『銅人腧穴鍼灸図経』『十四経發揮』系の鍼灸の比較
- 8 後代への影響
  - A. 『鍼灸大全』『神応経』への影響
  - B. 『鍼灸聚英』『鍼灸問対』『鍼灸大成』『鍼方六集』への影響
  - C. 現在の中医学鍼灸に対する影響と臨床的意義

（文責：篠原孝市）